

---

# ごあいさつ

## 藤田佳久

〈愛知大学東亜同文書院大学記念センター長〉

2006年5月、愛知大学東亜同文書院大学記念センターが文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業としてのオープン・リサーチ・センター整備事業に認定されました。5カ年間の事業であります。

このオープン・リサーチ・センターは愛知大学の前身的大学である東亜同文書院大学に関する所蔵資料類を広く公開する目的で認定されました。これまで愛知大学東亜同文書院大学記念センターは東亜同文書院記念基金会の設立を契機にして、書院卒業生である山田順造氏から父上の孫文関係の多くの遺品の提供を受けたこともあって、もっぱら展示施設中心の組織に留まっていました。

それが、今回、オープン・リサーチ・センターの新たなプロジェクトの展開の中で、従来、不十分であった東亜同文書院大学をめぐる総合的な研究にも着手することになりました。その公開事業としてシンポジウムや講演会、研究会も開催することとし、ほぼ1年間実績を積んできました。

そして、あわせて、愛知大学が戦後昭和21年設立時に東亜同文書院大学から継承した部分も多く、そのような経過の中で愛知大学史の研究にも新しい視点で取り組むことも可能になりました。すでに愛知大学50周年記念誌が編集刊行されていますが、創設期以来の東亜同文書院大学との関係という視点は十分ではありませんでした。

そこで、2年目を迎えた本年、そのような新たな視点から愛知大学史を研究領域として集約化する研究機関誌として『愛知大学史研究』を刊行することになりました。この編集刊行については、前述の愛知大学50周年記念誌の編集を任じられた大島名誉教授が中心となり、1年目の研究成果の実績もふまえて御尽力をいただきましたし、今後も御尽力をいただけることになりました。

今日、日本の大学は日本の財政問題、少子化、学問の多様な発展、進学率の上昇、国公立大の法人化などの環境の中で大きく揺れつづけています。そんな中で学部や教育領域の再編成が目まぐるしくすすみ、ややもするとネーミングの目新しさだけで学生を集めようとする動きもあります。

そのような中で、愛知大学は戦後すぐの設立という長い歴史をもち、前身校として東亜同文書院大学の時間を加えるとまもなく110年を迎える長い歴史をもっています。それは同時に伝統に裏打ちされた愛知大学でもあり、その原点とそこから展開した諸事象とその舞台の研究により、あらためて「温故知新」のベースづくりになって、学内はもとより、卒業生や地域の方々を通して大きな貢献にもつながることだと思われまます。

このような機関誌を得たことが、愛知大学のアイデンティティの再確認とその発展に大きく寄与することを期待し、あわせて皆様方の御協力もお願いすることで、ごあいさつとさせていただきます。